
キンモクセイ

樋口斗聖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キンモクセイ

【Nコード】

N3030F

【作者名】

樋口斗聖

【あらすじ】

キンモクセイをモチーフに秋のお話中学生の男の子の幼い恋の情景ですボーイズ・ラブのお話です

（前書き）

B Lに興味のない方は閲覧に注意ください

木立から差し込む朝日がまぶしい渡り廊下を、僕達は小走りに進んでいく。

先頭を青山くんが、その後ろから僕。

寮は校舎のそばにあつて、5分ほど庭園のように整えられた花壇を抜けるとレンガ造りの建物が連なるエリアに入り込む。

一番手前が中学寮。真ん中は教員寮で一番奥が高校寮だ。

自宅から通う僕には縁のない建物に一瞬ひるんでいると、手をとられひっぱっていかれた。

抜け出してきた礼拝堂からはオルガンの調べと歌声が聞こえてくる。

「あのさ 見つからない？」

声をかけた僕に、青山くんが振り返った。

頭ひとつ大きな僕を見あげにこりと優しい笑顔を見せた。

「大丈夫。」

きつぱりした彼の視線をまっすぐに受けても、僕の鼓動はちょっと不安で脈打っていた。

今日は日曜日にもかかわらず地域の中学が合同で主催している合唱会の日で、

本当なら昼まで見学していなければいけないからだ。

『退屈だからちよつと出ない？』

私語が禁止のホール内で青山君がふと僕の耳元に唇を近づけ、囁いてきた。

驚く僕の耳にそして爆弾のような一言。

『この間の 続きをしようよ ねえ？』

「伸くん・・・」

「・・・」

ちゅっ。

しつとりとした唇が触れあい、脱出に成功したお祝いのキス。

「汗びつしより　かわいい。」

ニコニコ笑いながら告げられた僕の頬に、かあっと血がのぼってくる。

ふがいなく真つ赤になった顔をどうやって誤魔化そうか、あたふたする僕からすると離れて青山くんが窓に向かう。

開け放たれた窓から秋のさわやかな風と甘い香り。

いつもなら港の潮のほうが強いの。

「この匂い　好きなんだよね。」

窓のすぐそばにはキンモクセイ。オレンジと白のクチャツとした花が今を盛りに芳香を撒き散らしている。

「開けたままでいるとよく布団の上に落ちてるんだ。」

ルームメイトはトイレの匂いって嫌がるけど。」

青山くんの腕の動きに合わせてキンモクセイの枝が大きくしなり

軽やかに戻ってきた掌には花びらが握られていた。

何の気なしに僕はそれを受け取る。

「中国のお茶でキンモクセイとウーロン茶が混じってるのがあってね。」

すごくいい香りがして美味しいんだよ。」

指先で花びらを弄ぶときつい香りが部屋一杯に広がっていくような気がする。

「へえ・・・　伸くん　飲んだことあるんだ。」

「親父が出張のお土産に買ってきたんだ。」

珍しいんで会社でも喜ばれたって。」

「飲んでみたいな　それ。」

「中華街にならあるかもしれない。専門て・・・」

青山くんがそつと僕の手首に触れてきた。すつと上にのぼり花びらを弄んでいた指先をなでる。

その瞬間僕の体にはまるで電流のような何かが背筋を一気に駆け抜けていく。

「ん。伸くんの指キンモクセイの匂いがする。」

綺麗な指先がその口元に運ばれていくのを僕は目で追った。

ちゅっ　ちゅっ　くちゅ

息を吞むほど綺麗な顔の青山くんの唇が、舌が僕を愛撫するのを見守るうちに中心がピクピクと脈打っていく。

敏感になった指先が消えては現れ僕の呼吸が速くなる。

「青山くん！」

口元から漏れる卑猥な音、

それだけで一気に高まり達してしまいそんな快樂の波に僕は我を忘れて堕ちていく。

窓の外はキンモクセイ。僕と彼に絡みついてむせ返りそんな芳香に堕ちていく。

浸っていたいような逃れたいような

「あつ……やつ……あつ……あつ……あつ」

消えない印のように僕の記憶に刻まれていく。

閉会式のはじまったホールにそつと戻ると何事もなかったように最後尾の席に座り込む。

どつと疲れが押し寄せて前の席に突っ伏したまま一緒に拍手する気にもなれない僕達。

ステージの上では参加した学校の代表者が記念品を受け取っている。髪のを指でほきながら青山くんが

「解散したら帰っちゃう？」

落ち着いたらご飯食べに行こう。」

「え、どこに」

「中華街がいいな。いい？」

物憂げながら斜めに僕を見あげる魅惑的な眼差しにまだ特別な続きがあるのかなと想像して、

さっきの記憶が、感覚が、「頭に、身体に蘇ってきてしまう。

深呼吸・・・ そうだ深呼吸・・・

指先にはまだ甘い香り、

そういえば あのお茶はなんて名前だったっけ・・・？

（後書き）

秋をテーマにしたものを書きたくなくて、漫画のネタで考えていたものを小説におこしました。

後半が甘めになってしまってちょっと恥ずかしいですね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3030f/>

キンモクセイ

2010年12月9日14時48分発行